

「美枝ちゃんってなんているか理屈っぽいよね」

私はそれを聞いて思わず次の言葉を想像し身構えてしまった。私はまた失敗してしまったのかもしれない。慌てて取り繕うための言葉を探す。だが彼女はこちらに振り返ることすらなく、続ける。

「悪い意味じゃなくてね。そんなふうに見えるのってすごいと思うし、私もたまに救われてると思うんだ。だから私、美枝ちゃんのそういうところ、嫌いじゃないよ」

予想もしていなかった言葉に面食らう。それと同時に、安心したようなくすぐったいような気がした。そんなふうに言ってくれた人は初めてだったから。

彼女——重野彩花しげのさやかはいつも色んなことやものを軽率に好きだと言う。でも本当に好きなものを指してたまに「嫌いじゃない」と言うのだ。私は彼女のそんな時々素直じゃないところが嫌いじゃなかった。

ベッドの上で、私——藤倉美枝ふじくら みえ——はそんな懐かしいことを思い出していた。出会ったのは高校二年の春のこと。新年度が始まり一週間やそこら、クラス替えがあったためにみんながまだそわそわしていたときだった。たまたま委員会が同じになったのがきっかけで仲良くな

った。

それからしばらくして、それなりに個人的な話ができるほど仲良くなったときの会話がこれだった。悩み事を相談されたのでついあり得る可能性と現実的な解決策をつらつらと提示してしまったのだ。当時の私でも、こうした物言いが人を喜ばせるわけではないということとはわかっていて。というより、経験則で知っていた。だから、失敗したと思った。その後の一瞬で、次は失敗しないように気をつけようと考えるとどこまで思考が飛んでいたのだった。だが彼女は、そんな私を否定しないでいてくれた。

私は寝返りを打つ。身体や顎が歪まないように普段は仰向けで寝るようにしているが、今日はなんとなく眠れなくて落ち着く姿勢を探し続けていた。

私は彼女のことを親友だと思っている。彼女は明るくて、前向きで、努力家だ。誰でも彼女を好きになれると思えるほどだ。だが、私にはたまに弱いところを見せてくれる。だからというわけでもないが、私は彼女と親しい間柄だと思っていた。何気なくされる相談の全てに的確に答えられているわけではない。でも彼女は悩みを共有できると少し安心したような顔をしてくれた。そのことを理解した上で振る舞うのは、打算的だろうか。安心させられていると思うのは私の傲慢だろうか。そうやって強迫的に自分の心の奥底を探りに行く癖は最近になってより強くなった気がする。

それと同時に、一々親しさに理由を求めないと不安になる私のこと

も自覚していた。だって、彼女はすごく良い人で、何かきっかけが違えばこの立ち位置には誰か別のもつとふさわしい人がいたんじゃないかと思ってしまうのだ。そうか、だから私は不安で理由を探しているのか。ようやく胸のつかえの原因が可視化された。だがそれは眠りにつこうとする私には到底解決できそうもないことだった。

考えようとしても思考が空回りしていくことに気付いて、ようやく眠れそうだった。また寝返りを打ち、仰向けになる。身体を動かしただことで一瞬眠気が引いていく隙間に思考が差し込む。

（結局私は自分を軸にしか考えられない人間なのだろうか）

それはここしばらくずっと自分に問うていることで、だからこそ一瞬の隙間に入り込んできた。

徐々に思考は散り散りになり、直前の思考の代わりに、わずかな胸の痛みが残る。雑多な音や言葉のイメージがまとまりなく流れているのをぼんやりと自覚する。これは眠りにつく直前の合図だった。

翌日の昼。二限のギリシャ哲学の講義を終えたところだ。

「美枝ちゃんはお昼どうする？」

一緒に授業を受けていた友達の一人、香織さんが話しかけてきた。

「ごめん、今日他学部友達と待ち合わせしてて」

「そっか、じゃあまた明日ね」

私との会話を聞いて、他の友達も口々に「またね」と言った。私は手

を振り返しながら一人別の建物に向かう。

黙々と歩き続ける。逸る気持ちに寄り添うように、数週間ぶりに会う気まずさを誤魔化すために、少し早足になる。季節は梅雨に入るから入らないかという微妙な時期だ。若干汗ばんできたのを感じて、ペースを落とす。どのみちもう目的地には着くところだった。そう、相手は――

「なんだか久しぶりだね、美枝」

そう人好きする笑顔を浮かべながらベンチに座っていたのが彩花だった。

今は大学二年の夏。私と彩花は同じ大学に進学したものの、学部が違ふということとで高校のときのような頻度で会うことはできなくなっていた。私は文学部、彼女は薬学部だ。夜に通話なんかはすることもあるが、やはり会えないとなんとなく心は離れてしまうようで不安な気持ちもあつた。だから、どちらからともなく定期的に会う約束を取り付けるようになっていた。

「それでどう？ 今年から専門の授業も入ってきたと思うけど」

私が彩花の隣に座ると、すぐ話題を振ってくれた。

「そうだね、まだ概論的な話も多いけど、段々と面白くなってきたところかな。そっちは？」

普段は会話を回す目的で聞き返すことも多いが、本当に興味があるかと自然と聞き返してしまうものだな。

「こっちはまだ準備ってところかな。それなりに好きなどころではあるんだけど、理論化学の部分は結構勉強が大変かな。でもこれから暗記が多くなるだろうしそれと比べたら楽かもね」

彩花はそう苦笑いしながら言った。何度か他愛ない会話を重ねた後、私たちはどちらからともなく立ち上がり、大学の外を指して歩き始めた。今日はどこにしようか。

結局近くのカフェに昼食を兼ねて行くことにした。行きつけという程ではないが、どこに行くべきか迷ったときによく来る。店内は落ち着いた雰囲気、店の奥には向かい合って座れる四人席と二人席がある。私たちはいつも二人席に座る。四人席だとなんだか二人で独占しているのが悪い気がしてくるので、私はちよつと待つことになったとしても二人席に座りたがった。

奥から二番目の二人席に腰を下ろす。店員さんからお冷やをもらって暫くしてから、私たちは会話を再開した。言葉を交わす度に、少しずつ心がほぐれていく。ここに来るまでに会話のテンションはいつものものになっていた。

「でさ、やっぱりそういう極論って大抵真実からはほど遠いと思うんだよね。人が演繹できる思考の範囲っていうのは人が思っているより狭くて、考慮しきれない心的要因とかが絡んでくる分、経験的に得られている中庸的な考えが結局の所正解だったりするんじゃないかなって」

「あーちよつと違うかもしれないけど急がば回れみたいな？」

「うん、良い例かも」

私は安心して話せる相手には容赦なく早口でまくし立てる癖がある。普段は話す内容を事前に減らすことで対処しているが、基本的に何を言っても恥をかかない間柄だと全部話そうとしてこうなる。対する彩花は賢く、ちゃんと理解した上で受け止めてくれる。時には忌憚なく否定的な意見もくれる。私の性格を理解して、肯定以外の反応をくれると会話が楽しい。一方私というと、元々人の話を耳で聞くのが苦手なので、あとで思い返しては彩花の返答の的確さに真似できないなと舌を巻くときがある。

ちよつと一方的に話すぎたな、と思って彩花が話題を振るのを少し待つ。それに、そろそろ彼女が最近何を考えているのか聞きたくなつた。

「こんなこと話されても困るかもしれないんだけどさ」

「何？」

私は待つ姿勢を言葉に込めた。心なしか彩花の声のトーンが上がつた。こういうとき、大抵彼女は真剣な悩みを抱いている。軽いトーンで話そうとして、わざと調子を上げるのだ。私は彼女のそういう不器用な優しさが愛おしく、またもどかしかった。

「私さ、薬学部に向いてないんじゃないかなって」

「……どうして？」

やっぱり、深刻な悩みだった。判断材料が足りず、まだ何とも言えな

いので私は先を促す。

「えっと、何か周りの人のモチベーションが結構高くてさ。私みたいな資格目的な人がやっていけるのかな、って思っ。それに……」

「それに？」

「……うん、何でもない。こっちは多分関係なかった」。

最後にちよつと引つかかるところがあったが、本人がそう言うのなら良いだろう。なるほど、自分が薬学という学問に高い志を持ていないというところか。でもそんなの、ありふれたことだと思っけど。だが本人にとっては真剣に悩んでいることだ。ありふれた悩みだからといっ。てくだらない悩みだとは言えない。お冷やで口を湿らせることで時間稼ぎをして、言葉を組み立てる。

「多分だけど、社会って大体がそういう人で構成されてるんじゃないかな。慰めにはならないと思っけど、それでも社会が回ってるなら、きつと彩花も大丈夫だと思っ」

まあ楽観的すぎる意見だと言われればその通りだけど、と付け加えて彼女の返答を待。つ。

「うん、それはそうかもしれない。そうかもしれないだけど……」

どうやらまだ何かあるらしい。

「実は薬学部を選んだのって将来の安泰のためなんだ。ほら、前にも言っ。たことあるけどうちって貧乏じゃん？ だからこうでもしないと状況が改善できないんじゃないかって……」

私は続きを促すように一つ頷く。

「でも、ずつとこのまま効率的なだけの生き方をするのかなって思っ。たら、なんだか嫌になっ。てきて……。もうちよつと自由に生きてみた、い、って言うのかな」

詳しいことは知らないが、半ば外力により学部を選ばされた故の悩みといっ。たところか。正直根本的な解決策は思いつかないし、自分で学部を選べた私が言うのも嫌味になっ。てしまっ。そうでい。やだが、一つアドバイスは思いついた。

「彩花はさ、もしかしたら立場に縛られすぎなんじゃないかな」

「立場に？」

「そう、だっ。て薬学部だからっ。て薬学以外のことをや。ちやいけ。ないなんて決まりはないし、就職してからだっ。て仕事以外のことをしても全然問題ない。どの立場でもやりようはある。確かに専念するより色々と劣るかもしれないけどね」

「別に用意されたものにただ従っ。だけじゃないってことかな。そっ。か、その気になれば多少は融通が利く、か」

私の言葉を自分なりに解釈してくれ。たよう。だ。

「そういうこと。それに彩花っ。て要領も良いし、手札も結構多いと思っ。うんだよね。あんまり偉そうなことはい。いたくないけど、視野を広くもっ。てみたら良いんじゃないか、という私からのアドバイスでした。おしまっ。い」

一方的に説教しているみたいでなんだか耳が赤くなっ。てきたのを感じたので、この辺で切り上げることにする。語っているうちは楽しい

が、こういうのは後で不安になる。全部の事情を把握してはいないから、これが正しい言葉だったのかはわからない。だが彼女の様子を見ると少しは力になったようだ。

ちなみにこのアドバイスは私の実体験から来たものだ。八方ふさがりに見えたとしても、意外といつでも多少やりようはあるものだ。根本的な解決にはならないが、自分で状況を少しでも変えられるというのは良いことだ。

「うん、ありがとう。確かに全部は解決しないけど、ちょっとだけ不安がなくなった、かな？」

彼女はそう言って笑った。普段周囲にばらまいている笑顔よりは弱々しかったが、その取り繕わない笑顔の方が私には嬉しかった。

「じゃあこの話は終わり！　ところでこのコーヒージェリーすごく美味しいよ！　美枝も食べてみる？」

「切り替え早いね。じゃあお言葉に甘えて一口」

この切り替えの早さも彼女の美点の一つだ。私なんて何年も前に言ったこととか言われたこととかをずっと引きずっているのに……。誤魔化すようにコーヒージェリーを口に運ぶ。ゼリーのほんのりとした苦みと生クリームのしつかりとした甘さが口の中に広がる。甘さの方はスツと消えて、やわらかい後味が残る。

「うん、これは美味しい……」

「でしょ？」

彩花は嬉しそうに目を細めて笑った。人が美味しいと言っているの

を見てこんな風に嬉しそうに笑える人を私は他に見たことがない。

「ねえ、一つ聞いていい？」

「ん……何？」

彩花は口に含んでいたものを飲み込むと、続きを促してきた。

「彩花だってさっきみたいに悩みはあるわけでしょ？　なのはどうしていつも笑ってられるの？」

それを聞くと彩花は一瞬目をそらすように右上を見上げて考えた後、こう言った。

「だって、今は楽しいから。そういうもんじゃない？」

ああ、私にはそれがどうしようもなく羨ましかった。

それからまたしばらく経った。今は学部友達と一緒に学食に来ていた。

「美枝ちゃんは今何に興味あるんだっけ？」

「えっ？　うーんと……」

ボーッとしていたところに話しかけられて口ごもる。耳から入った言葉をもう一度頭の中で読み上げることによってようやく言葉を理解する。だが理解できたところで返答の言葉に困る。というのも、私は結局大学でしたいことが明確に定まっていなかった。

「……実はまだちゃんと決まっていらないんだ」

「そっか。まあまだ二年生だしね」

「みんなは？」

「私は多分哲学になるのかな。私もどれを専門にするかは迷ってて色々読んでる段階だけど。香織さんは？」

「私もそんなにはつきりしてるわけじゃないけど、フランス文学あたりが気になってるかな。まあ好きな小説があったってくらいの理由だけだね。」

「あー私そっちもあり得るんだよね。色々見てから決めたいな」

「だったら今度ゼミやるんだけど一緒に来ない？」

「気になるけど何やるの？」

「文学史の概論的な内容で考えてるけど、どの本でやるかは人が集まってるからかな」

「んーちよつと日程だけ確認してからにするね」

「了解。美枝はどう？」

二人の会話を聞きながら私は悩んでいた。正直私はあまり興味がなところだが、このまま何もやらないのもどうなのかと考えると、やっておくべきじゃないかという気もしてくる。

「その辺の内容よくわからないんだけど、具体的にどういうことを扱うの？」

「んー例えば――」

香織さんがつらつらと語るのに頷きながら、ぼんやりと私との熱量の違いを感じる。私はやりたいこととなんか違うということを言い訳にして、今まであまり本気で取り組めていなかった。いや、やってみた

ら思っていたより大変な部分が多かったというだけのことかもしれない。だからこうして生き生きと日々を過ごしている人を見ると、焦燥感に近い後悔が湧き起こってくる。

「ありがとう。今度図書館に行つて自分でも調べてみるね。ゼミについてはどうちよつと考えてみる」

「了解。……あ、私そろそろ行くね。二人はゆっくり食べてて」

「うん、じゃあまたね」

香織さんはスタスタと歩いて行つた。どうやら私の知らない男の人に呼ばれたようだった。

「あれが噂の香織の彼氏だよ。結構イケメンじゃん」

私は彼の顔をよく見もしていなかったがとりあえず頷く。そうか、大学生になったらみんなそういう関係ができていくものなのか。未だに実感が湧かない。

「美枝はつくらないの？ 彼氏」

「私は……」

私は、いつからかぼんやりと恋愛のことが嫌いになっていた。別に人が嫌いになったわけじゃない。ただ恋愛のこととなると人はどこか熱狂的になってしまうのが嫌だった。特定の誰かを好きになるという幸せなことにすら、逆説的な嫌悪感を抱いていた。

顔がどうだとか服装がどうだとか髪型がどうだとか身長がどうだとか芋臭いだとか垢抜けるだとか、当たり前のように人を品定めする空気が嫌だった。それは幼稚な意地っ張りだとわかっていても、世間へ

の違和感は拭えなくて、私はずっと停滞したままだった。

「……将来的には結婚はしたいけど、なんだかちょっと怖くて」

「ちょっと重いなあ。別に人それぞれだと思うけど、大学生のうちに経験くらいしておいた方が良いと思うな。今のうちなら失敗してもいいし。ほら、大人になってから初めて恋愛すると失敗しがちってよく言うじゃん」

「うん……確かにそうだね」

自分が恋愛できるかどうか気にし始めたのは、漠然と孤独が怖くなったからだ。一人暮らしを始めてから、自分が一人になったときのことを想像してしまうときがあった。私は孤独を恐れてパートナーを求めているだけなのだろうか。ただ先に訪れるであろう寂しさを埋めるためにだけに求めているのだろうか。そんな自分勝手な理由じゃあ失礼なんじゃないだろうか。

いや、わかっている。そんなふうにごちゃごちゃ考えずにさっさと行動するのが正解なのだろうとは自分でもわかっている。そういう内的な理由なんて気にしたところでどうしようもないものだ。それらは後からついてくるものだ。だからきつとこれは行動しないでいるための言い訳だった。

私はただ焦っているだけなのかもしれない。今しかない、という言葉が今の私にとってはたまらなく怖い。

午後の授業の間も、ノートを取りながら思考は遠くに飛んでいた。

結局私はこれからどうしていくべきなのだろうか。そんな疑問がぐるぐると頭の中を巡っている。

大学に入る前までは大学生活に諸々の希望を抱いていた。きっと大学に入ったら自分のしたい勉強ができて、夢だった研究者に着実に近づいていけるのだろうと思っていた。その道のりを甘く見ていたつもりはないが、大学に来てから各所から事情を聞くようになって想像以上に狭き門だったとわかり、ここにきて尻込みしている。

そこからさらに考えてみると、今度はそもそも研究が好きなのかどうかわからなくなった。勉強とか、考えることは好きだったからなんとなく研究者になりたいと小さい頃からずっと考えていた。だがそれは所詮既に誰かがならした道を歩くようなお遊びでしかなく、本当に道なき道を切り開く気概と言うべきものが私にはないと気付いたのは最近だった。

勉強に本腰が入らない、ただそれだけなら良かった。もう一つの問題は、過去の私が否定していたはずの生き方にどこか羨ましさを感じていることだった。私は学問に人生を費やすつもりで生きてきた。だからいわゆる青春なんかはおざなりだった。恋人だっていたことがない。今まではそれで良かった。だがその学問という寄る辺を失ってしまった。私には何も残っていない、そんな気がしてしまうのだ。いや、そもそも私は一人で生きていけるほど強くなかったというそれだけの話だ。

それがわかっている、自分からは行動できていない。そもそもど

うすれば良いのかもよくわかっていない。だって、今までそれらから逃げ続けていたから……。

その日の夜、私がとった選択肢は友達に相談するというありきたりなことだった。誰かに相談するという選択肢を思いつくまでにかんりの時間を費やしてしまった。こういうことに中々思い至れないのも、私の偏った生き方の産物なのだろう。そう、今まで私は全部一人で考えていた。一人で解決できることしか相手にしてこなかったから、と考えれば何だか納得が行って、心の中で自嘲的に笑った。

相談相手に選んだのは彩花だ。彼女は私から見てもしつかりしている。普段の明るく軽ささえ思わせる振る舞いとは裏腹に、彼女はむしろしつかりすぎている節がある。単純に付き合いが長いというものがあるが、私は彼女のことを信頼している。

十分前に通話できるか文面で聞いたところ、もう返事が来ているのを確認する。携帯の画面を操作して、通話ボタンに指を運ぶが、そこで逡巡する。彼女と夜に通話するのは初めてではないが、ほとんどは彼女から誘われたものだ。ただでさえ通話は緊張するのに、こちらからかけるとなるとさらに不安になる。話し慣れた人が相手でも変な緊張があるので通話は苦手だった。

軽く深呼吸して、気持ちをリセットする。そして不安が差し込む前に通話ボタンを押す。その約五秒後、通話が繋がった。

「もしもし。急に夜に連絡しちゃってごめんね」

「うん、全然いいよ」

「ありがとう。実は今日はちょっと相談したいことがあって……」

「私に答えられる範囲でなら答えるよ。それで？」

私は促されるまま考えていたことを言語化していく。

「私、大学に入ってから気付いたんだけど、やってみたら何だかやりたいことは違うような気がしてきちゃって……。それでこれからどうすれば良いのか迷ってるんだよね」

「うん」

彩花は一度こちらの言うことを受け止める姿勢になる。相談され慣れているを感じる。相談したくなる気持ちは私にもわかる。

「結論から言うと、将来のことを考えて不安になってるんだ。漠然とした不安なんだけどさ、漠然としすぎて私にはどうにも解消できないんだよね。だから色々経験して考えてる彩花に聞きたくてさ」

ああ、こうしていると私に何か相談するときの彩花の気持ちがわかる。自分から相談しているはずなのに、心配してほしくないと考えてどこか明るい調子で話してしまう。それに、悲しくもないのになぜだか涙が出そうになる。人に心情を吐露する経験に乏しいせいかもしれない。唾液を飲み込んで、話を続ける。

「元々考えるのが好きだったから研究者になろうと思ってたんだけど、色々話を聞いていると研究って私にとっては何か違う気がして。けど就職も大変そうで。それに今になって自分に恋人がいけないことに焦ってもしるんだ。でも自分は勉強で生きていけるものだとばかり思っ



てたから、そういう問題にどう対処すればいいかわからないんだ」

「なるほど、就職と恋愛ね。後者はともかく前者は多少はアドバイスできるかな。バイトとか結構やってるし」

「うん、よろしく」

意外なことに恋愛経験はないらしい。いつも忙しそうだし、現を抜かしている暇はないということだろうか。

「何から話そうかな……。まあまず言っておくとしたら、ちゃんとやれば意外となんとかなるよ。世の中には思ったより沢山仕事ってあるからね。自分の力を生かせるかどうかは別として、ある程度考えて選択すれば生きて行くには困らないと思うよ。まあ就活を適当にやるとブラックなところに飛ばされるっていうのはよく聞くけどね」

「そういう……ものかな」

「まあ、あくまで私が知る限りだけど」

生きて行く分にはなんとかなる、か。少し安心するような、むしろ不安になるような気がする。そもそもちゃんと就活するということが私にできるかわからない。今まで私が力を入れてきた世界とは別物すぎる。

「あまりに選択肢が多すぎて何を目指したら良いのかわからないかも。大企業に行けたらそれで成功って一口に言えないわけだし。それにできれば自分の学んできたことを生かせる環境にしたいって考えると、私が学んだことって何に生かせるのかわかって」

そうか、これが不安の原因か。私は自分の強みを生かしたいと思っ

ているが、生かせると思っていた研究者の道を諦めてしまった。じゃあ次に何を目指せば良いのだろうか。今になってこんなに悩むんだったらいつそ……

「いつそ、私も彩花みたいに資格がとれる学部になれば良かったのかな」

それは何気ない独り言に過ぎない言葉だった。

「……私は選んだんじゃなくてこれしかなかった」

だが、それが琴線に触れた。しまった、と私は思った。何がまずかったのかはわかっていないが、今彩花を傷つけた感覚があった。私は頭が真っ白になったが、その一方で変に客観的に原因を探し始めていた。

「私はさ、ほんととは文学部に行きたかったんだ。でもボロボロになりながらパートで稼いで私を育ててくれたお母さんを見てたらさ、安定して稼げる道に行って楽させてあげたいって思ったんだ。だから私は夢を諦めたの」

「あ……その……ごめん」

「……別に、謝ってほしかったわけじゃない。でもね、私の方が羨ましいみたいに言われると、嫌味みたいにしか聞こえなくなっちゃうの」

彩花の声は少し震えていた。

「だって、学校に通うお金を出してくれる親がいて、小さい頃から好きな物を食べさせてもらえて、好きなものを買ってもらえて、好きなことをさせてもらえて、自分で選択ができて。……なのになんでそんなに苦しんでるの？」

言われっぱなしで、さすがに私も頭に血が上ってきている感覚があった。

「私の人生なんて楽なもんだって言いたいのか？」

「……こんなことは言いたくないけどそうだとしか思えないよ」

「私の何がわかるって……」

一瞬、怒りが沸騰しかけたが、私の冷静な部分は私の非を理解していて、怒りの中にむしろ反省と疑問があった。言われてみれば不思議だった。どうして私は苦しんでいるのだろうか。これだけ恵まれていて、今までこれといった失敗もなくて、それなのになぜこんなにも未来が怖いのだろうか。

「……美枝のことはちゃんと知れてないかもしれない。でも美枝だって私のことを全部わかってるわけじゃない」

「……」

「そっちは何だかんだで失敗してもどうにかなるんでしょ。だから選ぶ余地があったし、実際選んだ。ならもつと幸せそうにしてよ……！それ以下の私の人生が……惨めになっちゃうじゃん……」

彼女の訴えは徐々に悲痛な色を帯びていった。私は選べるからこそある後悔というものもある、と反論したくなったが、それは彼女の苦しみと比べられるものではないと思って喉まで出かかった言葉を止めた。私はまだ他人に甘えていたのだ。私は善意に頼り切っていたのだと今更気付いた。自分の苦しみを振りかざせば同情してくれると思いがついていたのだ。

「……ごめん、言い過ぎた。ちょっと今日は冷静になれそうにない。ごめん……」

「うん……私もごめん」

こんなに悲しそうな謝罪なら聞きたくなかった。通話が切れる。私は携帯を手放すと椅子から立ち上がり、おもむろにベッドに腰掛ける。衝撃と怒りも既に通り返して、ただ疑問だけが私の中に残った。彼女の言い分はもつともだった。どうして私はこんなに恵まれているのに苦しいのだろうか。幸福も苦しみも相対的なものだ。だから私が苦しんでいないわけではない、と思う。だが、だからこそ私には自分からなかった。

今夜はもう冷静に考えられる気がしなくて、そのまま眠ってしまうことにした。

翌目が覚めると時刻は九時だった。一瞬焦ったが、今日は二限からだ。一晩寝てごちゃごちゃとした思考はなくなっていたが、昨日のことを思い出すと気分は晴れなかった。

大学生生活自体は不思議なくらい普通に過ごせた。学部の人達には何も気付かれなかったし、私も頭のどこかにモヤモヤとした思考があるだけで、それ以外は特に変わった感覚はなかった。会う人によってモードが切り替わっているという感じだろうか。

そうしているうちに何事もなく四限が終わり、私は今日の講義を受

け終わった。ただいつも通りの一日だった。結局普通に生活している中では何も考えは浮かんでこなかった。だから私は真っ直ぐ家に帰らず近くの川に向かった。

考えが行き詰まったとき、私は決まって川沿いを散歩をするようにしている。歩くというタスクで適度に意識を分散させることで少し離れた視点でものを見ることができるようになるからだ。川の流れの音も適度に他の人の存在を忘れさせてくれる。集中したいときは適当な場所に座り込めば良い。

まだ夜は涼しい季節だ。日は落ちていないため若干暑さすら感じるが、散歩にはちょうど良い時期だ。いつもより気持ちゆつくりと街を抜けていく。やはり、こう人が多いと落ち着かない。その点川辺には人はそこそこいるものの道幅が広くて良い。人にぶつからないように意識して歩くのは疲れるから、人混みは苦手だ。

横断歩道を渡ると目的地だ。慣れた足取りで川辺へと降りていく。そこにつくと、まずは川特有の匂いを感じる。どこか海の匂いに似た、けれど強くない匂いだ。鼻から肺一杯に空気を吸い込み、口から吐き出す。そして、歩き出す。

歩きながらまずは問題を整理する。私は未来が不安だ。例えばちゃんと就職できるか不安だし、そもそも就活をするということ自体が怖い。今まではある程度好きなことができたが、これからはそうではないということに不安がある。一方で彩花はそういう世界はもうある程

度知っていて、その上生きて行ければそれで良いと割り切ることができる。多分、この辺は育った環境の違いだ。彩花にとっては普通に生活できることが当たり前じゃなかった。だからこうして生きているだけで満足しようと思っているのだろう。そんな幸せを、私は破壊しかけてしまったのだ。

橋の下をくぐる。

なら私も彼女と同じように、まず生きられることに満足するべきなのだろうか。それは難しいと思う。言うなれば私は贅沢を覚えてしまった身だ。その上でその贅沢にすら満足できなくなっている。足ることを知るのが幸福のために大事だとは知っていたが、それは口で言うほど生やさしいことではなかった。時間をかけて染みついた意識は中々変えられるものではない。他人の価値観を不愉快だと思いながら、その実一番その価値観に縛られていたのは私だったのかもしれない。西の空が少しずつ赤く染まっていく。沈みゆく太陽は、ここからは太陽に遮られて見えない。

もう一つ問題がある。私は孤独が怖い。友達はあるが、それだって結局のところ一時的なものだ。離れてしまえば必然的に会う機会もなくなって疎遠になるのは目に見えている。だから恋人が欲しいのだろう。でも、私に勇気はなかった。一人になるのが怖いという、消極的な理由しかないのもその臆病に拍車をかけていた。

今日もカップルとすれ違う。カップルを見ると苦く不安な気持ちになるのはいつからだっただろうか。

家族では私は満たされないのだろうか。……なんとなく、足りない気がする。私は一緒に生きてくれる誰かが欲しい。それは自分では選んだわけではない家族では足りなくて、きつと自分が選んだ相手が自分を選んでくれることが必要だったのだ。そんな、傲慢な理由で満たされないと思ってしまう自分が嫌だった。

歩き続けているうちに身体が火照ってきたのを感じ、ペースを落とす。

そもそも本当の問題はこういう具体的などころにはない気がする。いつからか私は現状に満たされるということがなくなっていた。小さい頃はこんなじゃなかった気がする。あの頃は未来の自分が全て解決できると思っていたという、ただそれだけの話なのかもしれないが。当時想像していた未来に立ち向かう今の自分は、当時想像していた自分よりずっと弱い。その上、中途半端に未来のことを考えられるようになってしまった。だから希望は不安に塗りつぶされ、未来はおろか気付けば今さえまともに楽しめないときがある。

多分、今抱えている不安がなくなっても何か別の悩みが出てくるのだと思う。今が積み重なっていく限り、過去への後悔や未来への不安は続く。どんな環境でも、きつといつか嫌になる。永遠の安寧を求めつつも、きつとそれが得られたら私は虚しくなる。

こんなことは今までに何度も考えた。人間は満たされないってわかったところで何が変わるっていうんだ。極論に走ったところで、そこに答えはない。言葉を弄したところで、今の私の状況は変わらない。

(お腹、空いたな)

歩き続けて、ふと自分の空腹に気がつく。もう歩き始めてからしばらく経ったところだろうから、そろそろ良い時間だ。私は座りやすそうなところを探して、川岸に座り込む。こんな気分でも、お腹って空くんだな。そんな当たり前なことにあらためて気付いた。

幸福とは何か。物事や価値は主観でしかないから、本当は全て無意味なんじゃないか。いや、そんな虚無主義はもう通り過ぎた。理屈の上でいくら達観しようとも、結局こうやってお腹は空くし、怪我や病気をすれば辛いし、孤独だと苦しいのだ。今日の前の苦しみは、いずれ死んで全て消えてなくなるとわかっていても、今という現実だけは消えてくれない。私という身体は、私に形だけの達観による解決を許してくれない。幸福と比べて、苦痛には何と言うか実体があった。

一方で今すぐ全てを無に帰して解決できそうな死という選択肢も、自分の中のどうしようもない生存本能に突き動かされているうちは選ぶ気にはなれない。いや、取り繕う必要は無い。私は死にたくなんてないのだ。だが同時に生きていることによって生じる苦しみも味わいたくないのだ。そんな相反する望みは一体どうすれば叶うのか。

そこまで考えて、何も思いつけそうになくて一度考えを霧散させる。その代わりに、精一杯息を吸い込む。匂いと景色、どちらが原因かはわからないが、どこか懐かしい記憶が刺激される感覚がある。息を吸っていると苦しくなってやがて吐き出す。吐き出すと、空気を吸えない時間を惜しむかのように、また吸う。そうしていると、さっきまで考え

ていたことが遠ざかっていく。ただそれだけで、不思議と今この瞬間はなんだか気分が落ち着いた。

未来や過去を忘れれば今だけは幸せだろうか？ いや、それは全く現実的じゃない。未来はいずれ訪れるし、過去への後悔はふとしたときに襲ってくる。でも、少しでも今を認められたら私は変わるかもしれない。

そう考えると、少し世界の見え方が変わってきた。今まで自分が苦しんでいる理由ばかり探していた気がする。だがそうやって不満を見つけ出してくまなく潰すのでは不満の再発に怯え続けるだけだ。私の目は今を見ているようにいて、過去と未来を見ていた。だから、ただ今そこにある幸福を拾い上げれば良かったのだ。

しかしここからは実践哲学の領域だ。一朝一夕では自分の考え方を変えられない。それに今まで自分が目を向けられていなかった幸福がどれだけあるのか、私は知らない。

そこまで考えて、私は今を変えられるかもしれない突拍子もない選択肢の一つ見つけた。私は立ち上がり、もと来た道を引き返す。今思っていたことを交えてじっくり練りながら帰路につく。

翌日の四限終わり、私は彩花を待ち構えるために薬学部棟の前で待つ。授業終了の時間になると、ぞろぞろと人が出てくる。誰かと目が合うのが怖くて伏し目がちだったが、それでも私は人混みの中から彩花

を探していた。

見つけた。彩花は私と目が合うと躊躇いがちに手を振り、スツと目をそらした。確かに私からしても気まずさはある。だが、それ以上に言わなければならぬことがあると決意してここにいる。私は迷いなく歩み寄り、勢いよく彩花の手を掴んだ。彩花はギョツとしたようにこちらをじっと見た。近くで見ればその顔は、直前のことへの驚きを除けば昨日のような私への怒りや悲しみより、申し訳なさや恐れの方が多いように見えた。

「話したいことが、あるんだ」

私はぎこちなく言葉を紡いだ。彩花は真剣な私の顔を見ると、表情を真面目なものに変えた。

「……私も」

「どこか人気がないところがいいな」

「それなら良い場所を知ってる。ちよつと歩くけど良い？」

私は頷いた。

私は歩きながら話し始めた。

「まず、謝らないといけないよね。昨日はごめん。事情も考えないで軽率な言葉でした」

謝罪を口にする、私は場違いに不思議な気持ちになった。思えば人に謝るというのは久しぶりだ。今まで人に謝るようなことをしでかさないうちに、どこか気を張ってきていたから。喧嘩するほど仲が良

い、という言葉は私へのうまい皮肉だった。

「うん、今までちゃんと話してこなかったのは私だから。それで気を遣えなんて虫のいい話だった」

彼女の言葉は理屈の上では正しかった。だが、それは彼女の本心ではないとわかっていた。このまま終わったらずっとわだかまりが残り続けると思うのだ。たとえ私には避けようがない地雷だったとしても、それを踏んでしまったがために彼女は傷ついたのだ。そんなの、彼女が良いと言っても私が嫌だ。

「ねえ、覚えてる？ 私が出かける約束を破って休んじゃった日のこと」

「うん、覚えてる。でも私は彩花が約束を破ったなんて思っていないよ」

あれは私たちが大学一年生の秋のことだった。私たちは休日に出かける約束をしていたが、直前になって彩花が体調が悪いと連絡してきて不意になった。最初は確かに残念だったが、今度は心配になった。だから、ちよつとした食べ物を買って届けに行こうとした。

彩花の住んでいる部屋のインターホンを鳴らすと、彼女はにわかに動揺した様子だった。ちよつと寝れば治ると言い張って私を帰そうとしたが、私が食べ物だけは渡そうと強情でいたらドアを開けてくれた。何やら彩花の様子はおかしかった。私が来たせいかと思ってそそくさと帰ろうとしたところで、呼び止められた。振り返ると彼女は私の目を見ないままこう言った。

「ごめんなさい……私体調が悪いつて嘘ついて約束破ったりして……。本当はただ……ただ昔のことを思い出していたら気分が悪くなつて……それで苦しくなつて……。本当にごめんなさい」

様子がおかしいのは、どうやら嘘をついた上に私に心配されて申し訳なくなつたからしかなかった。普段の様子からは想像がつかないほど弱々しい様子の彼女を見て私も動揺するが、冷静に聞く。

「どんなことを思い出したの？」

「……隠してただけど、実は私ね、昔父親から虐待を受けてたの。私への直接的な暴力はなかったけど、お母さんは殴られてたし、私もしょっちゅう怒鳴られてた。今でもたまに思い出すの。もうずっと前のことで、今はお母さんと二人暮らだし、もう落ち着いたはずなのに急にこうなつただけなの。だからごめんなさい。これ以上迷惑かけられないから帰ってもらつても……」

「あいにくだけど謝ることなんてないよ」

彩花は不安そうに顔を上げた。

「だってそれ立派なフラッシュバックの発作でしょ？ 本当に体調不良だよ、それは。心配はしても怒ったり責めたりなんてしないよ」

そういう症状を抱えている人を実際に見たことはなかったが、彼女の様子が普通ではないのはすぐにわかった。私はうまく落ち着かせる言葉なんてかけられそうになかったから、ただ自分が考えたことをそのまま伝えた。

一方の彩花は一瞬あつけにとられたような顔をしたが、直後泣きそ

うな顔になった。

「え、ごめんそういうことじゃなかった？　ちょっとこういうの苦手だから……」

「ううん、違うの……。私を心配してくれる人がいるってわかったら、嬉しくて」

彩花は目元を軽く拭ってから、私の目を見た。

「ありがとう、美枝」

ようやく謝罪じゃなくて感謝が聞けて、私はホッとした。

思えば、あのときから彩花は私にもっと色々なことを相談してくれるようになった気がする。不思議と私の方も彼女を信頼するようになった。

「私、あのことのことすっごく嬉しかったんだ。多分美枝が思っている以上に嬉しかったと思う。ただ気を遣って慰めてくれるだけじゃなくてさ、その状態は普通じゃないぞってちゃんと教えてくれたおかげで、あれから少しずつ抑圧してた気持ちを出せるようになったんだ。あの日から子供の頃の辛い記憶を思い出す頻度が格段に下がったくらいなんだよ？」

私としてはそんな大それたことをしたつもりはなかったのだが、行動の見え方は受取り手によるものだな。

気付けば私たちは丘の上の小さな公園に着いていた。遊具はブランコと滑り台と鉄棒があり、後は水飲み場と小さなベンチがあった。私

たちはベンチに座った。私はここに初めて来たが、やけに落ち着くところだな、と思った。

「美枝は優しいよ」

しばらくの沈黙の後、彩花は出し抜けにこう言った。

「……そんなことない」

私は頑として否定した。これは半ば反射的だったが、反射的にそう答えてしまうほど私の中では決まりきった答えだった。でも理由はそれだけじゃなくて、このままでは彩花が悪いという結論で終わってしまう気がしたからというのもあった。

「私は優しくなんてないよ。私はただ卑怯で臆病で、嫌われたくなくてこうしているだけ。その証拠に自分からは何も行動しないで、これ見よがしに与えられた機会にちよつとした善意を見せるだけ。そのも与えられた機会にも受動的におっかなびっくり心を注いでいるだけ。そんなの優しさじゃない！」

言葉を重ねる度に、ため込んでいた考えを吐き出すように語気が強まる。私はそういう受動的で臆病な自分が情けなくて、それを長所だと思うことができなかった。

「それが優しさじゃないってどうして思うの？」

「……」

「優しさってそのことなんじゃないの。きっと誰もが自分にとってはできて当たり前のことばかりやっているから、自分じゃ凄いつて思えないだけなんだよ」

反論の言葉が出てこなくて、私は黙り込んだ。やり込められたのに、何だか嬉しかった。彩花の言葉に私は毒気を抜かれたのだ。それと同時に、昨日思いついた選択肢はやはり正解だったかもしれない、と思った。

「ねえ彩花」

「？」

「幸福って何だと思う？」

今まではお互いにどこか気を遣いあった会話だったが、私はあえていつもの調子でこう言った。昨日ずっと考えていたことだ。

「彩花に言われて私も色々考えたんだ。私は確かに恵まれてて、それなのにどうしようもなく悩んでる。自分でもよくわからないけど、私には確かに苦しみがあった」

「うん、私もあれからずっと考えて、人には人の苦しみがあるってことに気付いて、美枝に言っちゃった言葉を後悔してた」

「それも正しい。でも私はこれだけ恵まれてるなら幸福であるべきだと自分でも思った。家族に恵まれ、環境に恵まれ、大病もなく、飢える心配や死の危険もない。それなのにどうしてまだ苦しいのか、自分でも不思議だった」

「……」

「多分、人は色々なことに喜びを見つけられるのと同時に、悲しみも見つけてしまうんだと思う。過去を見てしまうから後悔はするし、自分が手に入れられたかもしれないものを見てしまえば満たされなくな

る。未来を見てしまうから不安になるし、今さえ怖くなる」

彩花は相槌を打ち、聞きに徹してくれる。

「この前の私は就職と恋愛さえどうにかなればって思ってた。でも多分それが満たされたところで私には違う悩みが出てくるだけだと思う。生きている限り選択はあるから。ならスピノザみたいな決定論的な世界観を持ったり、ニーチェみたいな虚無主義者になってみたりしたら救われるかなって思ったけど、これもちよつと違った。考え方を変えたところでやっぱり苦しいものは苦しかった。結局考えは考えでしかなかった。方向性は間違ってたなかったかもしれないけど、そもそも変わるためには借り物の言葉じゃなくて、時間をかけて実践的に変わっていくことが必要だったんだと思う」

「……じゃあどうするの？」

私はいたずらっぽくニヤリとして、ベンチから立ち上がり、彩花と向き合った。そして、その顔のままこう言った。

「私と同棲しない？」

「えっ？」

混乱して彩花の表情が固まる。

「いつの間にか私は自分で作り出した考えで自分を追い詰めてた。だから私、思ったんだ。彩花の思う幸せの基準で私の幸せを塗り替えて欲しいって」

彩花が目をそらしてこう言う。

「美枝は……私がどういう人間かもうわかってるんでしょ？ 周囲に



愛想良くしてはいるけど、それはそういうふう振る舞うように育ったから。美枝には警戒が解けてるけど、だからこそその状態の私なんて大した人間じゃない。過去に幸せなことがなかったから、選択肢がなくて今を楽しもうとしているだけ」

それに対して私は申し訳ないと思いつつも思わず笑ってしまった。

彩花は怪訝な顔をしたが、私はそれに対して何のことないというように返す。

「それこそ、さつき彩花が言った通りだよ。『誰もが自分にとってはできて当たり前のことばかりやっているから、自分じゃ凄いつて思えないだけ』」

「それは……」

私はもう一度ふつと笑った。

「彩花は凄い人だよ。今までも逆境を跳ね返してきた。それしか選択肢がなかったからだって彩花は言うと思うけど。でもそうやって今を生きようとする力が、私は凄いと思う。だから、側に居て私に生き方を見せて欲しい」

そこまで言うのと、彩花は堪えきれなくなったかのようにフツと笑い始めた。ひとしきり笑い終わってから、彼女はこう言った。

「美枝は、私を置いていたりしない？」

「未来のことはわからないから断言はできないけど、少なくとも自分からそうしようとは思わないよ。でもお互い遠い職場に行ったり誰かと結婚したりしたら話は別かな」

「……私のまだ伝えてない嫌な部分がわかってても嫌いにならない？」

「その部分を嫌いにはなるかもしれない。でも彩花のことを嫌いにはならないでいようと思うよ」

そう言うとき彩花は楽しそうに、嬉しそうに笑った。

「嘘でも嫌いにならないって言えば良いのに。不器用なんだから。よく生きるのが下手だって言われない？」

「自分ではよく思うよ」

「ふふっ」

彼女は笑いながら言った。

「でも私は美枝のそういうところ、嫌いじゃないよ」

彩花はそう言った後、少し照れたように笑った。私も笑いたい気分だった。